

オープンアクセスによる研究者の 学術情報流通における 主体性の再興

引原隆士

京都大学

理事(情報基盤・図書館担当)

副学長

外圧か？

「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」

2024年2月16日 統合イノベーション戦略推進会議決定

【抜粋及び要約】

- 2025年度から新たに公募を行う競争的研究費※を受給する者に対し、
即時に機関リポジトリ等の情報基盤への掲載を義務づける。
- 即時オープンアクセスの対象は、査読付き学術論文及び根拠データとする。

※ 科学研究費助成事業(日本学術振興会)
戦略的創造研究推進事業(科学技術振興機構)
戦略的創造研究推進事業(日本医療研究開発機構)
創発的研究支援事業(科学技術振興機構)

詳細

- 「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」
(令和6年2月16日 統合イノベーション戦略推進会議決定)
- 「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」の実施にあたっての具体的方策
(令和6年2月21日 関係府省申合せ)

文部科学省 科学技術・学術審議会 情報委員会 ジャーナル問題検討部会 (2019-2021)

- ✓ ジャーナルを取り巻く問題が、従来の購読価格上昇の常態化にとどまらず、近年のオープンアクセスの急速な普及に伴い、論文をオープンアクセスにするための費用であるAPC(Article Processing Charge: 論文処理費用) 負担増など、より拡大・複雑化.
- ✓ 欧州では、OA2020 や PlanS などオープンアクセス化の動きが活発化し、我が国における研究成果の発信及び学術 情報へのアクセスが諸外国から取り残されてしまうのではないかといい危機感の一層の高まり.

要請



購読価格の継続的な上昇 及び APC 負担増への対応
研究成果の発信及び学術情報へのアクセスの目指すべき姿の検討

なぜ研究データOAが義務化されるのか？

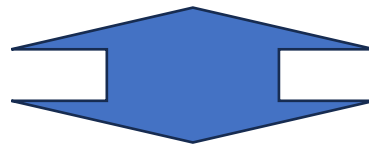
- ✓ 誰が求めているのか？
- ✓ 何が求められているのか？
- ✓ インセンティブはあるのか？
- ✓ 研究データとはなにを指すのか？
- ✓ 研究データは誰のものか？
- ✓ 過去のデータはどうするのか？
- ✓ 誰が保存するのか？

これら是否定的質問かつ
技術論にすぎず，受け身

研究者として育った環境に応じて認識が異なる

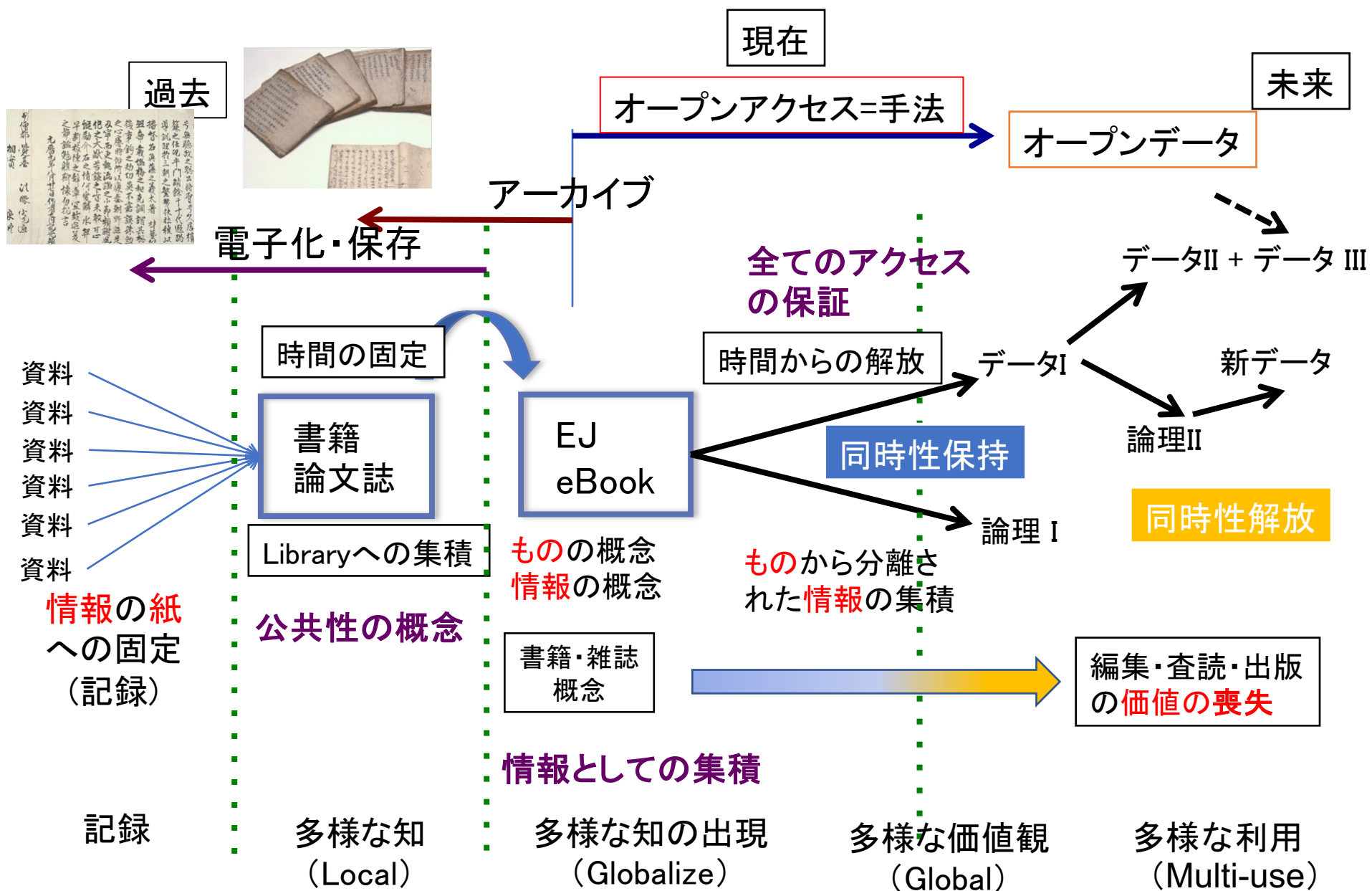
個人の経験的常識が他に通じるわけではない

本質： 研究成果（データ）へのリスペクト：オリジナリティの尊重
研究成果の可視化による透明性の確保：研究の公共性の担保
プライオリティの確保：研究者のインセンティブ

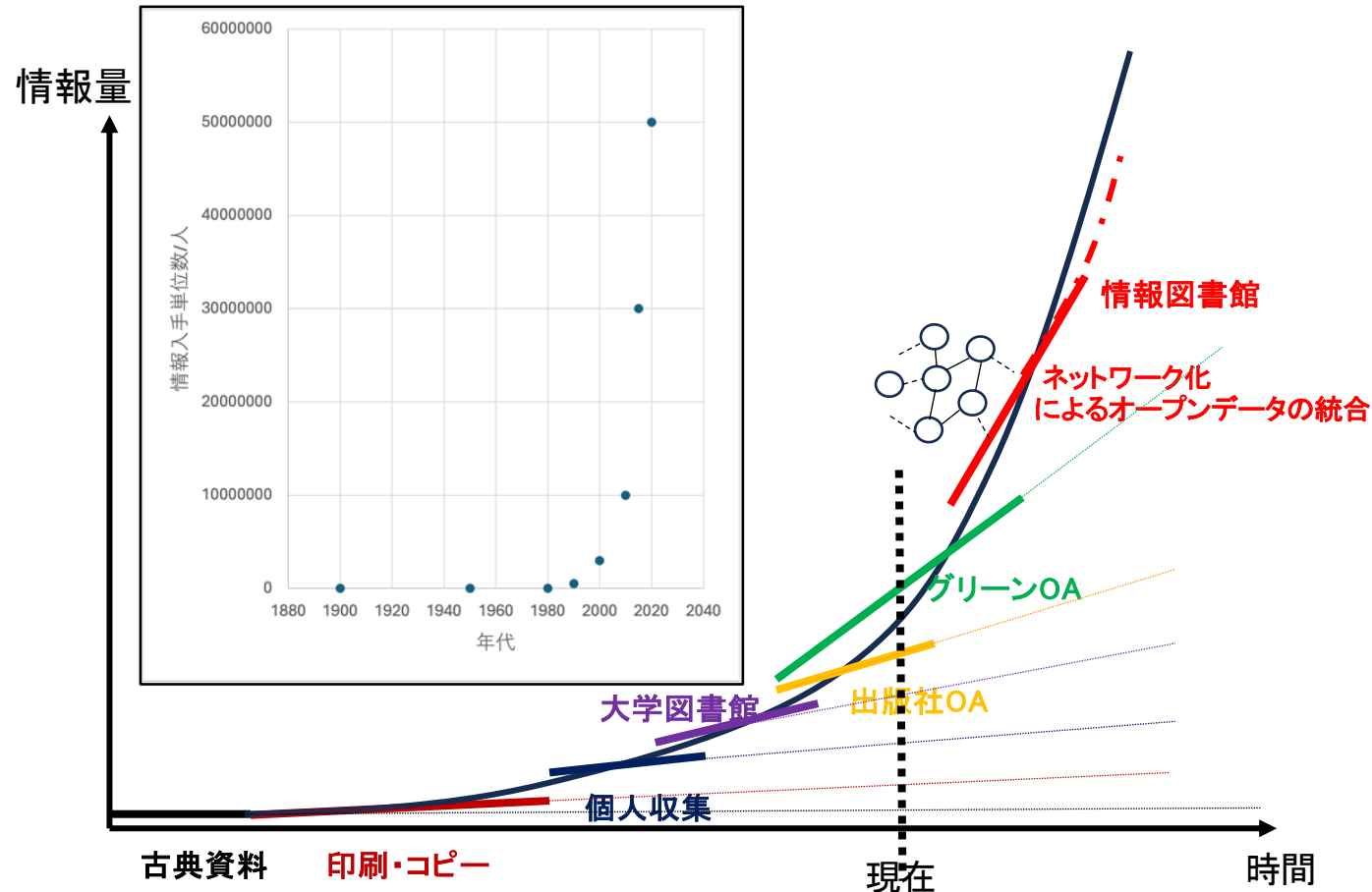


電子ジャーナル購読・出版費用への対応に直結する

学術情報の変遷の歴史から見る将来の形が描けているか？



研究者が自分で学術情報にアプローチできる限界

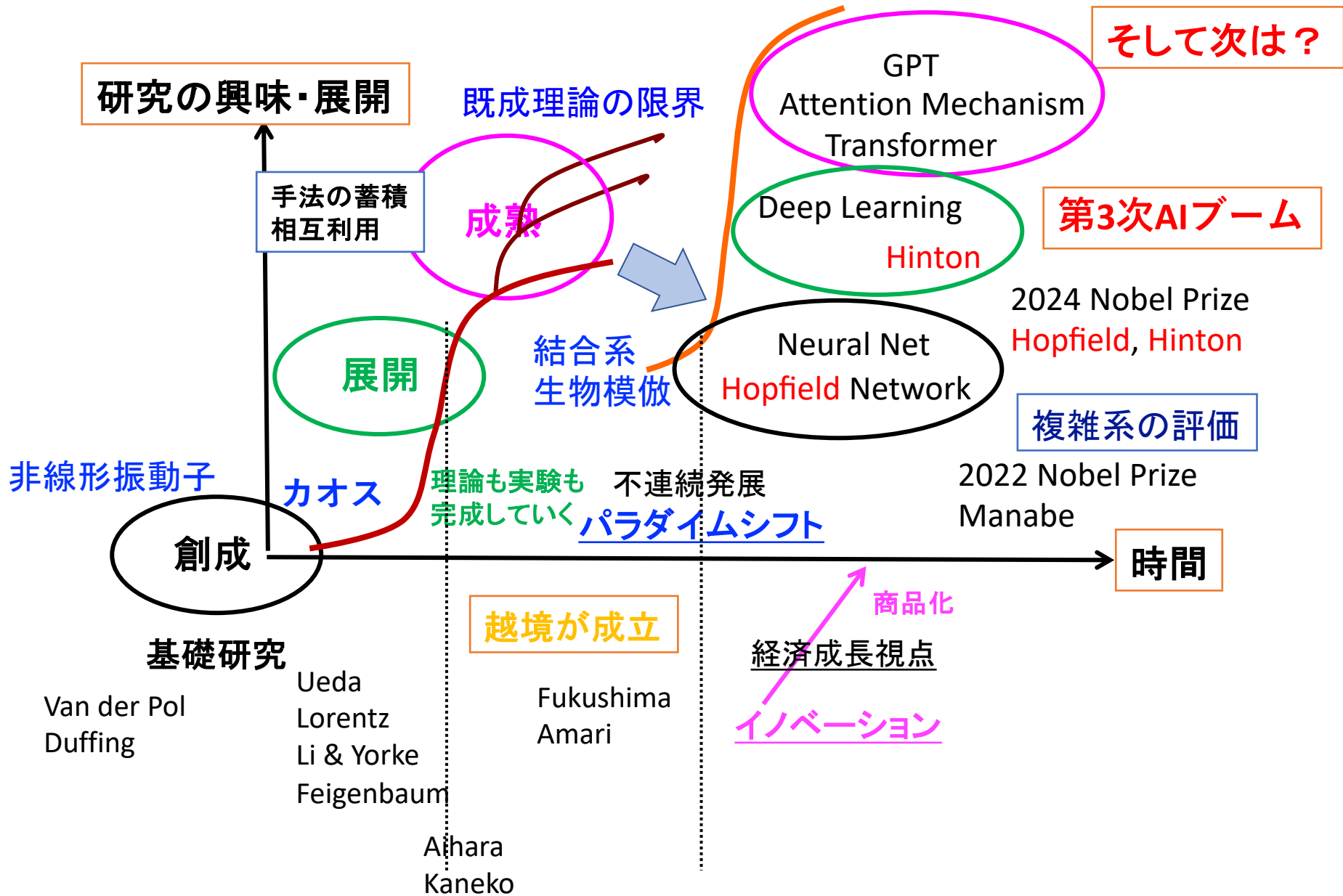


学術情報の指数的爆発

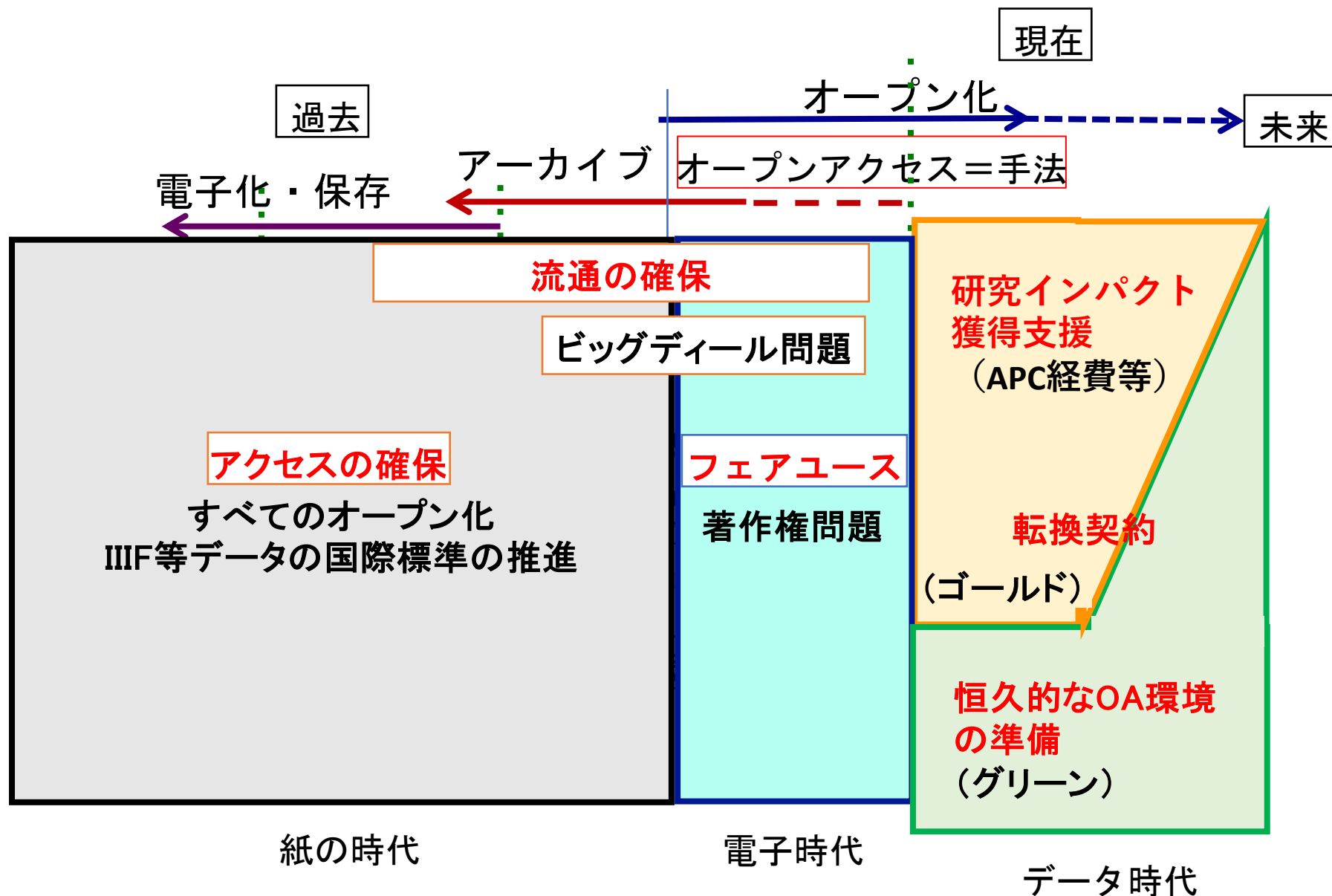
作図に当たって概算値は以下の通りとした。個人収集の平均 <100, 国会図書館 1,000万冊, 京大図書館機構 700万冊, 部局図書館 数万~50万, 日本の購入論文誌タイトル 1万, OASPA@2022 110万論文, 米国国会図書館資料 2億弱, 世界の蔵書数 ~数十億。1900 年100(個人), 1950年1,000(個人), 1980年10,000(図書室), 1990年500,000(複写), 2000年3,000,000(論文数@図書館), 2010年10,000,000(コンテンツ数@オンライン), 2015年30,000,000(ネットワーク), 2020年50,000,000(OA)。単位はitem数。

DOI: <https://doi.org/10.15108/stih.c202402>

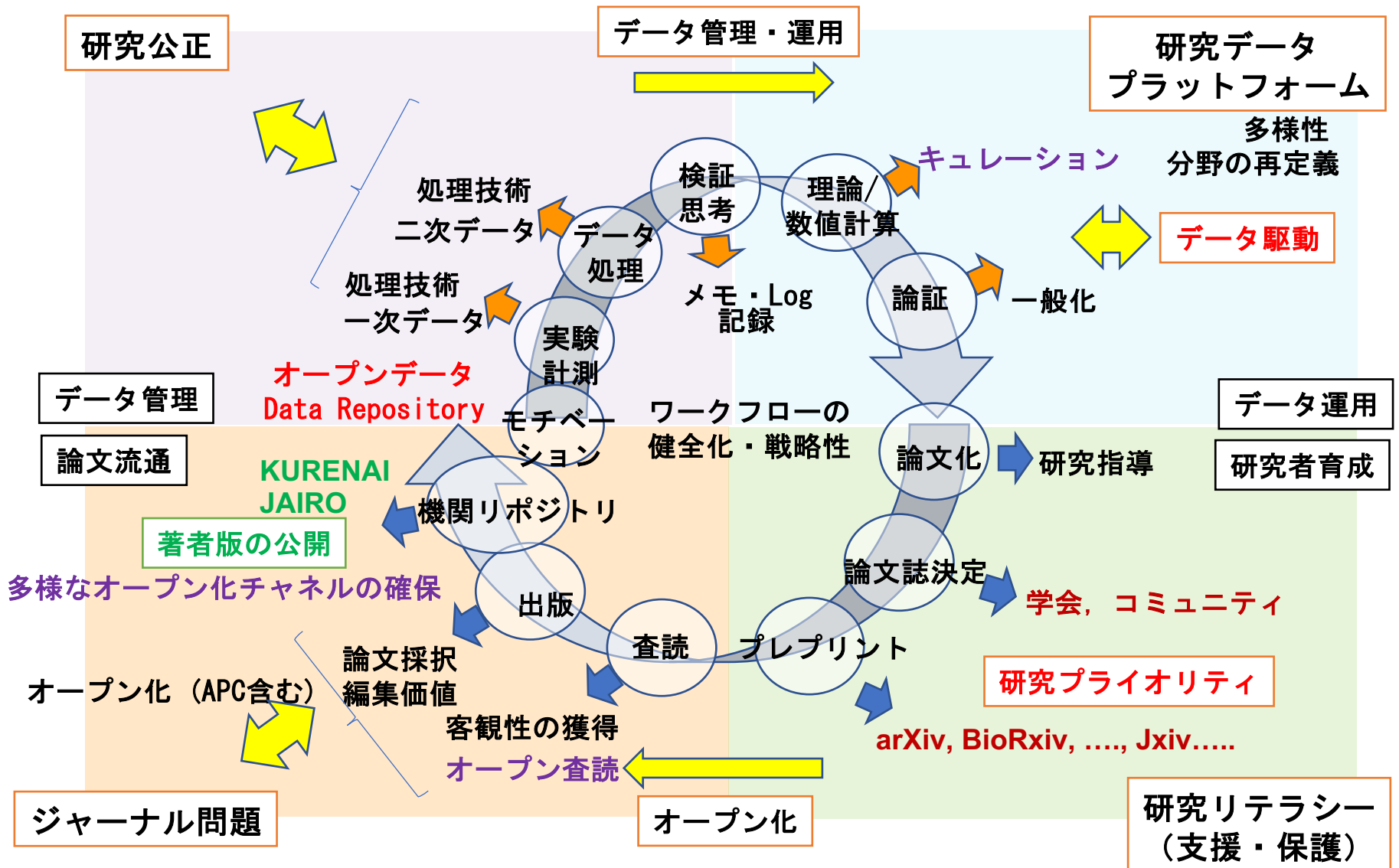
パラダイムシフトに既存出版は寄与していない



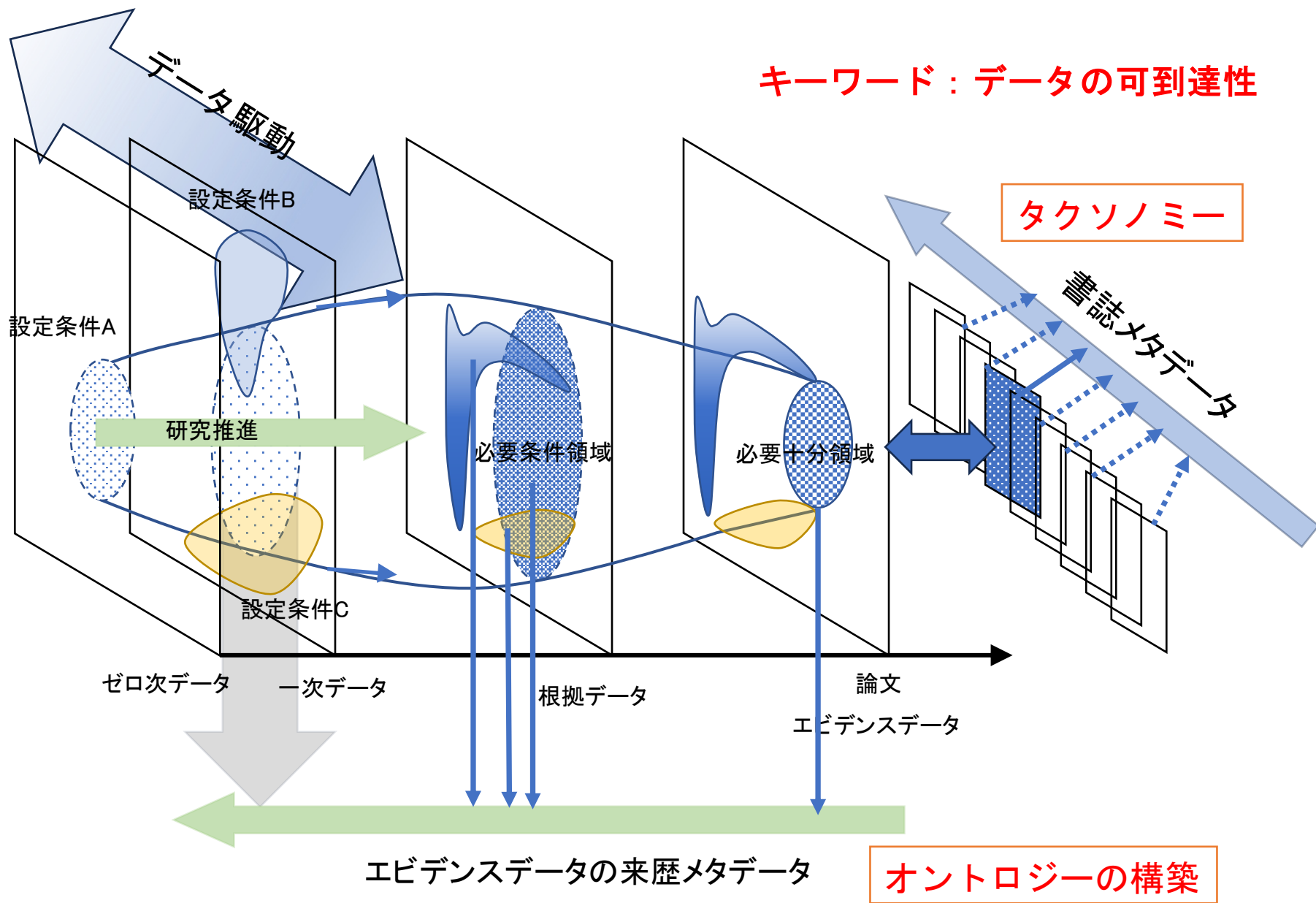
学術情報におけるアーカイブ化とオープン化の混乱 (研究者が入力と出力をコントロールすべき)



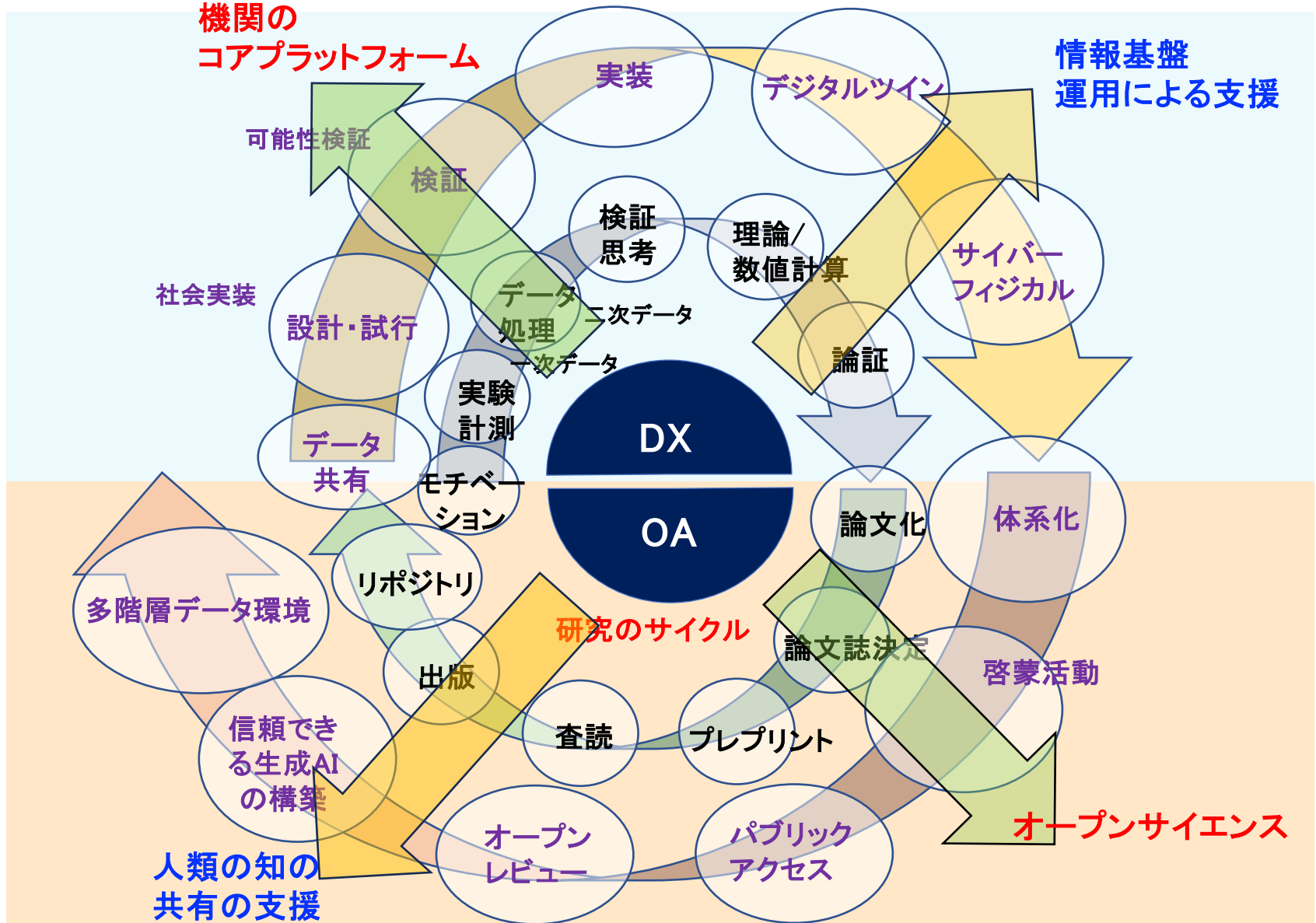
データを基にした研究ライフサイクルと研究者の主体性



学術論文と研究データ：政策決定者は分かっているのか



主体性は自律環境を作り出してこそ生まれる



学術情報流通を他の価値判断に頼っているこの国
学術成果を他からどう見られるかばかり見ているこの国
自分たちのルールを主体的に運用できないこの国
そこでパラダイムのシフトは生まれるのか？
どれだけ研究の萌芽を潰してきたかの自覚があるのか？

予算がつき、論文が通るようになったときは
すべてが終わっている

